

メッセージアウトライン 創世記27:1～41「祝福の行方」

[1-4]「イサクが年を取り、目がかすんでよく見えなくなったときのことである。彼は上の息子エサウを呼び寄せて、『わが子よ』と言った。すると彼は、『はい、ここにおります』と答えた。イサクは言った。『見なさい。私は年老いて、いつ死ぬかわからない。さあ今、おまえの道具の矢筒と弓を取って野に出て行き、私のために獲物をしとめて来てくれないか。そして私のために私の好きなおいしい料理を作り、ここに持って来て、私に食べさせてくれ。私が死ぬ前に、私自ら、おまえを祝福できるように。』」

この時イサクは百歳を超えていた。→創世記25:26,26:34 彼は老年となり体力も視力も衰えて自分の死ぬ時が近づいて来たと考えたと思われる。それで彼は長男のエサウを呼び寄せて、野に出て行って獲物をしとめ、そして彼の好きなおいしい料理を作り、食べさせてくれるように頼んだ。これは単に食事が欲しいからというのではなく、彼を長男、跡継ぎとして祝福するためであった。イサクは息子のエサウとヤコブの誕生の時の「兄が弟に仕える」(25:23)との神の定めのことばを当然知っていたであろう。

そしてエサウの長子としての権利をレンズ豆の煮物欲しさに弟ヤコブに売ったことも知っていたであろう。しかし、なおイサクは自分の好みのエサウを長子として祝福し、その特権を譲ろうとしている。これはなぜか。ここには子どもに対する偏愛という問題があったかもしれないし、ヤコブがエサウの粗野な性格につけ込んでうまく長子の権利を手に入れたという良くない印象を持っていたからかもしれない。それで、やはり誕生の順序としては明らかに長男であるエサウに祝福を与えようとしたのではないだろうか。ここには人間の持つ矛盾性というものが感じられる。

[5-13] しかし、イサクの妻リベカはこのイサクとエサウとの会話を聞いていた。普段父親に呼ばれることなどめったにないエサウがこの日、父親に呼ばれたということで、リベカは聞き耳を立てていたのかもしれない。それで、エサウが父親との約束を果たそうと野に獲物をしとめて出て行った時、リベカはヤコブに事の次第を話し、弟のヤコブのほうに祝福を得られるようにと計画を立てた。それはまずリベカが最上の子やぎ二匹でイサクの好きなおいしい料理を作る。そしてそれをヤコブに持って行かせる。(5~10) しかし、ヤコブは兄のエサウは毛深く、自分は違うので、もし父のイサクが彼にさわるならば、すぐに見破られ、祝福どころかのろいを招くのではないかと心配する。(11~12) リベカはこのことに対しても何か対策を思いついたようで、「子よ、あなたへののろいは私の身にあるように。ただ私の言うことをよく聞いて、行って子やぎを取って来なさい」(13)とヤコブを送り出す。

若い時のリベカは非常によく気が利き、美人で気立ての優しい娘で、アブラハムのしもべが、その息子イサクの妻となるべき女性を捜しにメソポタミアに来た時、彼女は水を求めたアブラハムのしもべだけでなく、らくだたちにも井戸まで何度も往復して水

を汲み、与え、それがしもべの祈りの答えであることがわかり、イサクの妻となるようにとの申し出に、「この人と一緒に行くか」と家族が尋ねると、「はい、行きます」と初々しく信仰をもって答え、親兄弟を離れ、イサクのもとに嫁いで来たのであった。リベカはこのような理想の女性のように思われたが、それから約六十年、今彼女は自分の弟息子のほうを偏愛し、彼のほうに祝福が来るようにと画策している。父親のイサクもかつては父アブラハムと共にモリヤの山に登り、父親に抵抗せず、縛られるままになり、全焼のいけにえとして今まさに殺されようとするに至るまで、その従順と信仰を示したりっぱな人であった。しかし今、兄息子のほうを偏愛し、後を継がせようとしている。二人とも理想の夫婦のようであったが、やはりアダムとエバ以来の罪の性質を受け継いでいたのである。

[14-17] ヤコブは母リベカのところへ子やぎを取って戻り、リベカはそれでイサクの好むおいしい料理を作った。(14) さらに彼女は自分のもとにあった兄エサウの衣を取って弟ヤコブに着せてやり、次いで子やぎの毛皮を彼の手と首の滑らかなところに巻きつけてやり、自分が作ったおいしい料理とパンを彼の手へ渡した。(15~17)

[18-25] このようにしてヤコブは父イサクのところへ行っただ。彼は「お父さん」と呼びかけた。彼は兄の声色をまねたのではないか。イサクは目が見えなくなっているので「おお、おまえはだれかね、わが子よ」と尋ねた。(18) 「長男のエサウです」ヤコブは最初は気乗りがしないままにリベカの命令に従ったであろう。しかしここに来るともうドラマの主人公になったように、目的を果たすためには人を欺くことさえ恐れない罪の性質全開の姿を見せている。「どうぞ、起きて座り、私の獲物を召し上がってください。そうして、自ら私を祝福してください」(19) このことばには半ば命令的、強制的な響きを感じる。ヤコブにとってはここで失敗するわけにはいかないのである。イサクはこれがエサウだとすればあまりにも早いのではないかとの思いを持って、「どうして、こんなに早く見つけることができたのかね、わが子よ」と尋ねる。これに対してヤコブはついに主なる神まで登場させて「あなたの神、主が私のために、そうしてくださったのです」と答える。(20) それでイサクの疑いはやや薄れるが、今度はさらに確かめるためにヤコブにさわろうとする。(21) イサクは彼にさわる。手にさわったのであろう。しかし、そこには子やぎの毛皮が巻き付けられていた。「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ」(22)

どうしてイサクはここまで来てわからなかったのかと思うが、やはり全体的な判断力が衰えていたのであろう。それでイサクは彼を祝福しようとする。しかし、最後にもう一度「本当におまえは、わが子エサウだね」と確認する。すると彼は「そうです」と答える。(23~24) それでイサクはヤコブが持って来た料理を食べたり飲んだりした。(25) これはリベカが作ったものであって、エサウが猟で取って来る動物とは味が違うはずである。しかし、イサクにはそれもわからなかったようである。

[26-29] イサクは「近寄って私に口づけしてくれ、わが子よ」と求める。これは愛する

子との結びつきの確認のためであろう。イサクに口づけしたヤコブからは彼の着ているエサウの衣のにおいがした。それについてイサクは祝福のことばを述べ始める。(26-27)

この祝福のことばはリベカとヤコブの欺きとイサクの誤解に基づくものであったが、それにもかかわらず、語られた祝福はヤコブのものとなる。現代の法律ならば、それは無効であると主張することもできるであろうが、この祝福のことばはそうではない。神はこのような出来事のすべてを摂理的に支配されてご自身のみこころを実現させられるのである。そのみこころとは、創世記25:23の「兄が弟に仕える」とのことばの実現であった。欺きは良いことではなく、人間の罪の現れである。しかし、なおそれをも用いて神はご自身の計画を進めることのできるお方なのである。ユダヤ人のかたくなさと愚かさがイエス・キリストを十字架につけたが、神はそのことを用いて、人類に対する救いの御計画を完成に至らせた。すべては神のご支配、摂理のもとに進んで行くのである。しかし、だからといって私たちが悪を行ってもよい、欺きをしてもよいということではない。このことはしっかり覚えておかなければならない。悪を行えば、罪を犯せば、やがてその報いを受ける、さばきを刈り取ることになるのである。→詩篇62:12,マタイ16:27,ローマ2:6,黙示録22:12

「神がおまえに、天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるように」(28) ここでは物質的な豊かさが与えられるようにと述べられている。

「諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように」(29) これは国々の中での優越性である。「おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように」(29) 兄弟たちの中での優越性が述べられているが、これはその子孫をも含む表現である。「おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように」(29) これは創世記12:3のアブラハムに対する主の祝福と同じことば。イサクはエサウに対してこのような祝福を与えるつもりだったが、それを受けたのは弟のヤコブだったのである。

[30-31] このようにしてヤコブが祝福を受けて父の前から出て行くとすぐに、兄のエサウが獵から帰って来ておいしい料理を作って父のところに持って来た。そしてヤコブと同じことばを語る。

[32-33] 「だれだね、おまえは」(32) イサクはヤコブがエサウの祝福にあずかろうとして来たのかと思ったかもしれない。しかし、声の主は「私はあなたの子、長男のエサウです」と答えた。これを聞いてイサクは激しく身震いした。彼は声とその雰囲気から確かに相手がエサウであることを知り、自分が重大な過ちを犯したことを自覚したゆえの衝撃、身震いである。「では、いったいあれはだれだったのか。……」とイサクは問うが、答えはすでに分かっていたであろう。「おまえが来る前に、私はみな食べてしまい、彼を祝福してしまった。彼は必ず祝福されるだろう」(33) この祝福はアブラハム、イサクと受け継がれてきた神の祝福であり、神の権威のもとにあるものであり、決して取り消されることのないものなのである。

[34-35] エサウはこれを聞くと激しく泣き叫び、「お父さん、私を祝福してください。私も。」(34) と求めるが、父は「おまえの弟が来て、だましたのだ。そしておまえの祝福を奪い取ってしまった」(35) と恐るべき事実を告げなければならなかった。

[36] 「あいつの名がヤコブというのもこのためか。二度までも私を押しつけて、私の長子の権利を奪い取り、今また、私への祝福を奪い取った」エサウは彼のかかと（アケブ）をつかんで生まれてきたことにちなんでつけられたヤコブという名をここで「押しつける（アカブ）」という悪い意味に関連付けて、長子の権利を奪い取り、祝福を奪い取った者として用いている。そして父に「私のためには、祝福を取っておかれなかったのですか」と問う。

[37] これに対してイサクはすでに祝福してしまった内容をエサウに語り聞かせ、「わが子よ。おまえのためには、いったい何ができるだろうか」ともう一度祝福はできないことを告げる。

[38-40] エサウの「わたしを祝福してください。私も。」(38) との涙の訴えに対してイサクは一連のことばを語る。これは祝福というよりもエサウの将来についての預言と言えるものである。

それはヤコブの場合とは逆に、その住む所が地は肥えておらず、天からの露もない(39) 場所で剣によって生きていかなければならないこと、そして弟に仕えなければならぬこと、しかし、奮い立つならば自分の首から彼のくびきを解き捨てるようになる(40) との内容である。実際エサウの子孫であるエドム人は岩の多い死海南東のエドムの地に住み、そこは農耕に適していなかった。そして、ヤコブの子孫であるイスラエル人に長年に渡って支配されることになる。「しかし、おまえが奮い立つなら」とは何度かイスラエルに対して反乱を起こし一時的に独立することを指しているのかもしれない。

[41] エサウは自分に対する父のことばを不満とし、それによってさらにヤコブを恨み、憎む。

「父の喪の日も近づいている。そのとき、弟ヤコブを殺してやろう」両親の偏愛はその子どもによる殺人にまで発展しようとする。ここにイサク、リベカ、エサウ、ヤコブのさまざまな問題が一気に噴き出してきているように思われる。親がどれだけ良い人のようであってもやはり罪人であり、彼らにもさまざまな弱さ、欠陥があった。そして彼らの子エサウもヤコブもしかりである。しかし、神はこのような罪人どうしのどろどろとした愛憎劇を通して摂理のうちにご自身の計画を進められていく。それはやがてヤコブの子孫として来られる救い主イエス・キリストにおいて完全に実現することになる

しかし、だからといって人間の罪深さや愚かさがそのままよいというのではない。それは贖いを必要とするのである。ここにはきよめられ、変えられなければならない人間の赤裸々な姿が隠すところなく描写されている。私たちもイエス・キリストを自分の救い主と信じ、罪赦され、信仰を持つ者とされているが、それでもイサクとリベカのような弱さがあり、エサウとヤコブのような欠陥を持っている。それゆえ私たちは神の祝

福を欺きや計略、自分の知恵で得ようとするのではなく、まず、神のみことばである聖書をよく読み、そこからみこころを教えられ、次に祈りつつ導きを求め、そして自分にできる最善をなしていくという順序でものごとを進めていくことが大切である。また自分の弱さや欠陥をよく知り、救い主イエス・キリストにあつて変えられ、きよめられて、みこころにかなう者として成長していく必要もある。私たちは信仰を持って、主にすべてを委ねつつ、導かれ、歩んでいかなければならない。→エペソ1:3-6,2:1-10